

1 研究の概要

(1) 研究主題

持続可能な社会づくりを目指して、自らの課題に気づき、課題解決を図ろうとする生徒の育成
 ー消費生活と環境に関する学習を通してー

(2) 研究主題設定の趣旨

現行の小・中・高等学校の学習指導要領には、持続可能な社会づくりのための視点が盛り込まれており、「持続可能な社会づくりの担い手」を育成するための教育としてESDが推進されています。国立教育政策研究所教育課程研究センターは、ESDの目標を「持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付けること」と設定しています。また、ESDの視点に立った学習を、持続可能な社会づくりに関する問題解決学習と捉えており、学習者が多様な価値観を身に付け、自らの意思決定のもとに実践していくことを重視しています。同センターが「学校における持続可能な発展のための教育に関する研究[最終報告書]」において、ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度として挙げている「批判的に考える力」「未来像を予測して計画をたてる力」「多面的・総合的に考える力」「コミュニケーションを行う力」「他者と協力する態度」「つながりを尊重する態度」「進んで参加する態度」は、家庭科教育が目指す資質・能力と共通するものです。

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」では、これまでの成果として、家庭科は実生活に役立つ教科であり、将来生きていく上で重要な教科であるなど肯定的に捉えられていると述べられています。しかし、家族の一員として協力することへの関心が低い、学習した知識や技術などが実生活で十分に生かされていないなどの課題も指摘されています。学校現場においても同様の課題を感じているところです。堀内かおるは「家庭科の学習は、生活に対するく気づき>から、生活の価値観を<築く>学習である」⁽¹⁾としています。本研究委員会は、これらの課題の解決には生徒自らが、いかに自分の生活の課題に気付けるかが鍵になると考えました。加えて家庭科では、生活者としてよりよい意思決定をするために、批判的思考力が必要とされています。批判的思考力は、物事を多面的に捉え、論理的にじっくり考えることであり、問題解決や意思決定をするための重要な要素であることから、多面的な見方の育成が必要だと考えました。

そこで本研究では、持続可能な社会づくりと関係が深い消費生活と環境に関する内容に焦点を絞り、授業に協働学習や思考ツールを取り入れて多面的・多角的な見方を育て、自分の生活の課題に気付かせようと考えました。新しい知識や他者の考えを知ることで、生徒がもっている素朴概念や思考に揺さぶりをかけて新たに概念化させ、当たり前と思っている生活に対する課題に気付かせることが必要だと考えます。また、これまで、他の教科等でも「持続可能な社会づくり」のための環境教育等は行われてきました。しかし、特に中・高等学校では、教科ごとの学習で終わりがちで、他教科間あるいは他校種間のつながりを意識した学習になっているものは少ないと感じます。多面的・多角的な見方を育てるためには、指導者が生徒の既習事項を把握して授業に臨むことが不可欠であると考えます。そこで、小・中・高等学校の家庭科を基点として、学習内容の系統について整理し、断片的に存在している学習内容を関連付けて考えさせる授業づくりに取り組みたいと思います。多面的・多角的な見方が育てば、周りで起きている様々な出来事に関心をもつようになり、物事の本質に目を向け、自分の消費生活と持続可能な社会づくりとの関係を意識し、課題を解決しようとする意欲につながるものと考えました。

(3) 研究のねらい

本研究では、まず中・高等学校家庭科の消費生活と環境に関する学習において、日常の生活行為を想起させることで当事者意識を感じさせたり、協働学習や思考ツールを取り入れることで生徒の多面的・多角的な見方を育てたりします。これにより、生徒自らの消費生活の課題に気付かせ、持続可能な社会づくりを目指して消費生活の課題解決を図ろうとする意欲を高めるための具体的な方策を探ることをねらいとしました(図1)。

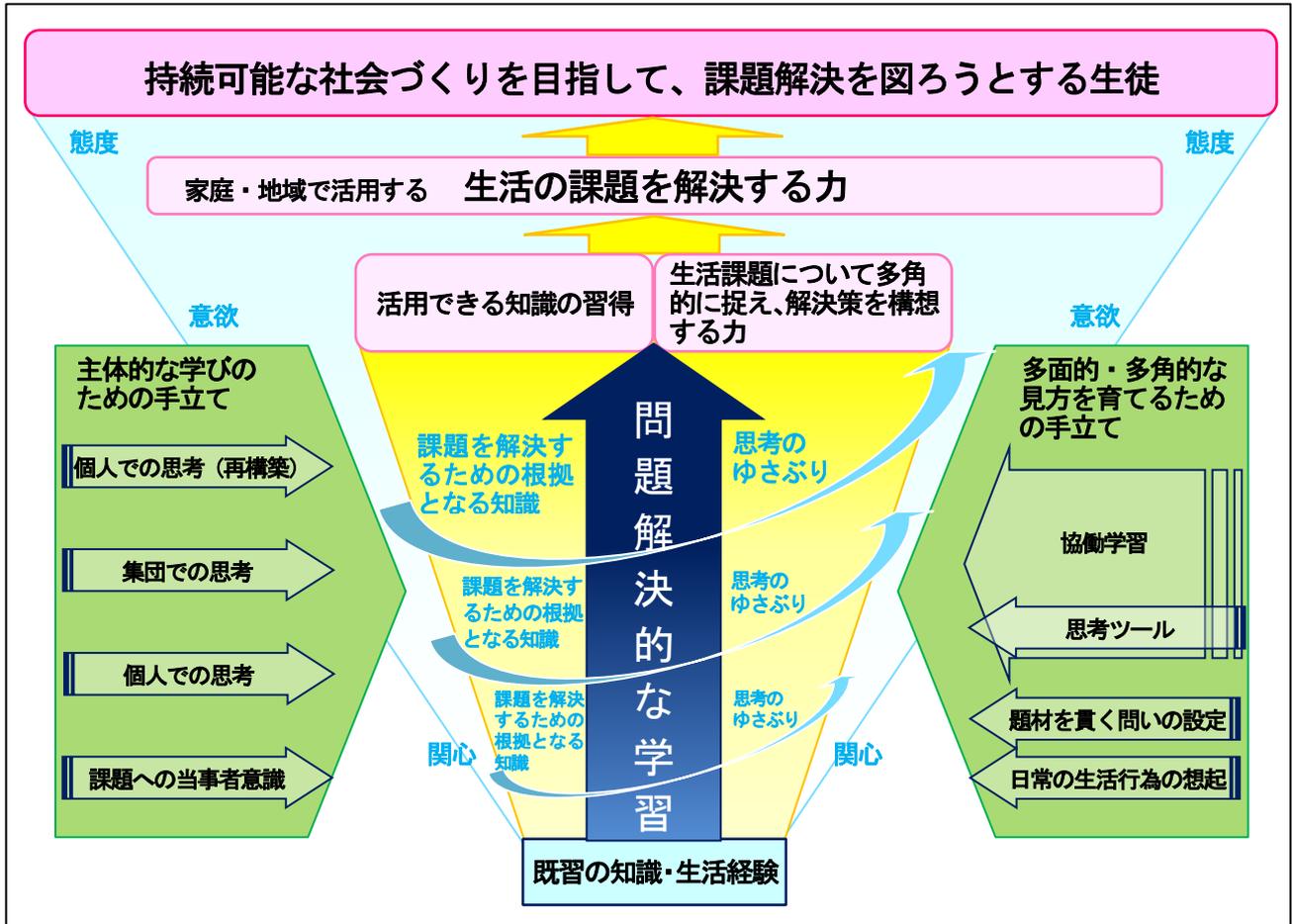


図1 研究の構想図

(4) 研究の方法と内容

- ア 多面的・多角的な見方を育てる学習方法や持続可能な社会づくりのための学習指導に関する先行論文研究により、これまでの授業のあり方を見直し、題材計画を作成する。
- イ 家庭科の消費生活と環境に関する学習を基点とした他教科間や他校種間の系統図を作成し、断片的に存在している学習内容を関連付けて考えさせる授業づくりに生かす。
- ウ 中学1年生と高校1年生を対象に、持続可能な社会づくりのために必要な多面的・多角的な見方を育て、実践意欲を高めるための授業の検証を行う。

《引用文献》

(1) 堀内 かおる 『家庭科教育再発見—気づきから学びがはじまる』 2006年 開隆堂 p.143